

## 頭塔の発掘調査

平城宮跡発掘調査部

頭塔は、奈良市高畠町字頭塔町921番地にある。奈良時代の高僧玄昉の首塚である、という伝承からこの名がある。遺跡の現状は、一辺約30~35m、高さ10mの方墳状の土壇であり、四方の斜面には、北に3体、東に1体、南に5体、西に4体、合計13体の石仏が露出している。遺跡は史跡に、石仏は重要文化財に指定されている。

頭塔の発掘調査は、1978年に当調査部が指定地の東辺部にT字形のトレーナーを設けて実施したのが最初である。この時は、基壇東辺の石積みとその外側の石敷きおよび第一段の石積みを確認し、更に、東面第一段中央石仏の北5.3mの位置で新たに石仏1基を発見している(『奈良国立文化財研究所年報 1979』)。

今回の発掘調査は、奈良県が行う頭塔の復原整備事業に先立つもので、頭塔の規模と構造の確認を目的とし、前回の調査区を含めた東北1/4(約300m<sup>2</sup>)について行った。その結果、基壇上に建つ、7段の階段状に積まれた石積みの塔本体と、5体の新たな石仏を確認した。

**基壇** 塔本体および基壇はほとんどが盛土である。基壇は地山上に砂質土を10~30cmの厚さで積む。高さは、基壇の端で0.7~1.2mある。基壇の外縁部には石積みがあり、更に、その周囲は玉石敷きで化粧されているが、石積み・石敷きとも基壇東辺に部分的に残るにすぎない。石積みは東辺中央から北へ6m分、石敷きもこれに沿う幅1m分を確認しただけで、石敷きの本来の広がりは明らかでない。東辺の石積みは、直径30~60cmの自然石を2~3段に積み上げた高さ0.7mのもので、基壇上面とのとりつきから考えて、ほぼ旧状を保つようである。石敷きは直径10~30cmの自然石を並べたものであるが、上面が不揃いで、かつ、裏込め土が柔らかく、当初のものではない可能性がある。基壇の北辺には石積み・石敷きとも残らないが、基壇盛土の裾が直線的に残ること、北辺裾近くの盛土に、石積みの裏込めに入れられたと思われる石が東西に並ぶことなどから、基壇端を復原した。頭塔の各辺中央の石仏から求めた想定中軸線をもとに、基壇辺の規模を復原すると、東辺が30.9m、北辺が32.8mとなる。両辺の長さの差は、基壇上面の幅が東辺約4m、北辺約3mと東辺が1m長いことによる。

基壇上面、塔本体の裾部には石敷きがあり、これには三期の変遷がある。当初(第Ⅰ期)は塔本体の第一段石積みの裾を巡る幅50cmの犬走り状の玉石敷きと、その周間に一段低く敷かれた幅20cmの礫敷きがあり、残る部分は盛土のままである。第Ⅱ期は第Ⅰ期の玉石敷きを埋め、その上に第一段石積みに沿う石敷きを部分的に行い、残りの部分全体を直径3cm前後の礫敷きとする。そして、第Ⅲ期には、この礫敷きを版築状のたたきで覆う。問題は、基壇上のこれらの玉石敷きと、塔本体の第一段石積みとの関係である。第Ⅰ期の玉石敷き、第Ⅱ期の玉石敷き・礫敷きは、ともに第一段石積みの下にもぐりこみ、現存する第一段石積みは第Ⅲ期の基壇上面に伴う。第Ⅲ期の版築状のたたきが第一段石積みの裾を覆っていることも、これと関連する。

頭塔発掘遺構図(1～14=既発見の石仏, A～E =新発見の石仏)

今回、第一段石積みを断ち割る調査は行えなかったが、塔本体には改修があり、現存する第一段石積みは改修後のもので、当初の石積みはひとまわり小規模であった可能性が高い。

**塔本体** 基壇上にのる塔本体は、石積みと石敷きで外装された、7段の階段状の土塔である(下から順に、第一段、第二段……第七段とよぶ)。基壇と同じく塔本体も盛土で作られている。崩れた東南部の崖面には、厚さ10～30cmで土を積み重ねた状況が現われている。盛土の中にはかなり大きな瓦の破片が含まれ、また、径50～60cmもある石が並んだ状態で顔をのぞかせている。塔本体の石積みは、直径30cmから大きいものでは1mを超える自然石を用い、ほぼ垂直に積み上げたものである。崩れ落ちた所が多く、第一段が2～3石分、高さ約1m程度を残すだけで、第二段より上の石積みでは最下段の1～2石が残るにす

発掘区西壁断面図(網は石仏),  
太字は石仏の番号(1:300)

ぎない。各段上のテラスには直径10~30cmの玉石を敷き詰めるが、頂上部には石敷きがない。各段のうち、第一、三、五、七段の奇数段には石仏が配置されるが、第二、四、六段の偶数段には石仏がない。各段の一辺の大きさを想定中軸線から計算すると、下から24.9、22.9、19.4、16.5、12.9、10.1、6.7mである。各辺の長さの差の1/2がテラスの幅となるわけだが、その幅は一定でなく、石仏がある段の前面のテラスが広く、石仏がない段の前面のテラスはやや幅が狭い。塔本体の高さは、基壇上面から8.1mを測る。

**石仏** 発掘区内では、従来から露出していた石仏4体〔(北面=第一段中央・第三段中央・第五段中央(頭塔発掘遺構図6・10・13)、東面=第一段中央(同図7)]と、1978年の調査で見つかった1体〔東面第一段北側(同図14)〕に加え、新たに5体の石仏を確認した。東面では第一段北側の北、第三段北側、第五段北側の3体(同図A・B・C)、北面では、第三段東側、第五段東側の2体(同図D・E)、の計5体がそれである。これまでに確認されていた14体とあわせ、合計19体が確認されたことになる。東面の第三・七段の中央の石仏(同図X印)は、既に失われていた。石仏は石積み前面より40cmほど奥まって立てられ、両脇に袖石を置いて全体として仏龕の形をなす。第一段の仏龕だけは、前面のテラスから一段高くなっている。

新発見の石仏5体のうち、東面第一段北側の北と北面第三段東側の2体の石仏は線彫り風で、しかも風化が進んでいるため、何を表現したのか明らかでない。前者が幅30cm、高さ60cm、後者は幅55cm、高さ70cmある。その他の3体は、浮き彫りで表現されており、保存状態も良い。東面第三段北側の石仏(幅55cm、高さ60cm)は説法図、第五段北側(幅110cm、高さ65cm)が五尊像、北面第五段東側(幅50cm、高さ55cm)が三尊像である。いずれも花崗岩製である。

石仏の配置は、第一・三・七段が各辺の中央に石仏を置き、第一段と第三段はさらに、その左右にも石仏を置く形である。第三段には北面、東面ともに、中央と左右1体づつの計3体が並ぶ。第一段の石仏配置は、東面で中央の石仏とその北に2体を確認したので、左右対称とすれば、5体が並ぶことになる。北面第一段では、東面第一段北側の石仏に対応する位置(同図X)に、現在、大きなアラカシが生えていて、石仏の有無を確認できなかった。積み石の様子

東面第三段北石仏

北面第五段東石仏

からすれば、仏龕を作っているようなので、ここにも石仏があるとみてよいだろう。しかし、東面北側の北（同図A）に対応する位置には、石仏も仏龕の痕跡もない。また、第五段だけは辺の中央に石仏がなく、中軸線を挟んでその左右に1体づつ計2体の石仏を配置する。以上の石仏配置を平面的にみると、東面では、下から5・3・2・1の数で石仏が並び、第一、三、五段中央の石仏、そして第一段北側の北、第三段北側、第五段北側の石仏（同図A・B・C）が、中心部から放射状にのびる直線の上に位置している。一方、北面では、東面第一段北側の北、に対応する石仏がないので、東面とはやや異なった配置を示す。

**出土遺物** 主な出土遺物は、瓦と土器である。瓦は、多量の丸瓦と平瓦に加え、多数の軒瓦がある。ほとんどが包含層から出土し、基壇上にも多量に堆積していたが、仏龕の周囲に集中する状況は観察されなかった。軒瓦は、奈良時代117点、平安時代3点、中近世28点、の合計146点が出土した。奈良時代の軒瓦は、115点が東大寺式軒瓦（軒丸瓦6235型式M種57点、軒平瓦6732型式F種58点）、重圓文軒丸瓦・軒平瓦各1点である。1978年の調査でも東大寺式軒瓦33点が出土地しているので、頭塔の1/4を発掘して、合計148点の東大寺式軒瓦が出土したことになり、面積に対して軒瓦の出土量が多い。その他、面戸瓦が数点出土した。

土器は、土師器、須恵器、青磁、白磁などがある。包含層から出土した他、石仏の龕内に供えられた状態で出土したものもある。平安時代後期から鎌倉時代初め頃（12世紀から13世紀前半）のものが最も多く、新発見の石仏龕内には供献された状態で土器が残っていた。東面第三段北側の石仏からは、13世紀初め頃の土師器皿約15枚が半円形に並べられた状態で見つかり、北面第五段東側の石仏の前面にも、12世紀代の土師器皿がいくつか置かれていた。いずれも、火をともした痕跡を残す。奈良時代の土器はごく少量ではあるが、基壇の盛土のなかから奈良時代後半の土師器が出土している。

**まとめ** 今回の調査によって、頭塔の構造がかなり明らかになった。従来、石仏の並び方などから、5段構造と考えられていたが、一辺約32mの基壇上に7段の石積みの塔本体がのる構造であること、ほとんど全体が盛土で作られ、基壇の周囲と塔の表面はすべて自然石を積んだり敷き並べて化粧してあったことが判明した。頭塔を特徴づける石仏も、新たに5体を発見したことにより、その配置状況を確認し、これまでの推定を裏付けることができた。出土遺物では、瓦に関する問題がある。創建当初の軒瓦がすべて東大寺式であることは、『東大寺權別當実忠廿九箇条事』に記されるように、東大寺の僧実忠が神護景雲元年（767）に東大寺の南に造立した土塔こそこの頭塔である、というこれまでの研究成果を裏付けるものである。しかも、その軒瓦は、軒丸瓦・軒平瓦とともに一種類の瓦范で製作されており、それが単なる東大寺式軒瓦の寄せ集めではなく、この頭塔造立のために集中的に製作されたものであることを推測させる。しかし、大量に出土した瓦の使用方法は、それを推測させるような瓦の出土状態、遺構を確認できなかったため明らかにし難く、第一段の石積みと基壇上面の玉石敷きの問題や、塔頂上部の施設の存否を含めて、今後の調査に期待したい。

（花谷 浩）